

第一章 藤壺の物語 源氏、藤壺の御前で青海波を舞う

[第一段 御前の試楽]

朱雀院の行幸(しゅじゃくゐんのぎやうがう)は、神無月の十日余り(とをかあまり、十日過ぎ)なり。世の常ならず(いつも以上に)、おもしろかるべき(盛大に予定された)たびのこと(今回の催し)なりければ(だったので)、御方々(同行なされぬ妃の方々は)、物見たまはぬことを口惜しがりたまふ(観覧適わぬを残念に御思いに為る)。

主上も(うへも、帝も)、藤壺の見たまはざらむを(藤壺が御覧になれないのを)、飽かず思さるれば(物足りなく御思いに為られて)、試楽を(しがくを、総稽古を)*御前(おまえ、清涼殿東庭)にて、せさせたまふ(執り行わせ為されます)。*「御前」は帝の前。帝の昼御座は清涼殿東向き廂。

源氏の中将は、*青海波(せいがいは)をぞ舞ひたまひける。片手には(二人舞のもう一方は)*大殿の頭中将。容貌(かたち、見た目も)、用意(ようい、舞い方も)、人にはことなるを(人よりは殊に優れていたが)、立ち並びては(源氏と並び立って見ると)、なほ花のかたはらの(やはり花を引き立てる)深山木(みやまぎ、背景)なり(に過ぎない)。*「青海波」は、《雅楽の曲名。音楽は盤渉調(ばんしきちゃう)で、唐楽に属する。二人で舞う。舞人は鳥甲(とりかぶと)を被り、青海波に千鳥という模様の衣裳を付け、千鳥の螺鈿の太刀(らでんのたち)を帯びる。非常に艶美な舞楽。(小学館古語辞典)》、との事。「螺鈿の太刀」は、《鞘(さや)に螺鈿の装飾を施した太刀。公卿は大饗や列見などの際に、諸衛府の次官は節会(せちえ)の際に帯びた。(Yahoo 辞書、大辞泉)》、とある。原型は中国渡来の楽曲とされ、波間に舞い飛ぶ千鳥の風情、が何を意味するのかわ定かでは無いが、意味よりも情景自体を愛でるべきものなのかもしれない。YouTubeに京都伏見城南宮の曲水の宴で「青海波」を舞う動画のアップがあった。*「大殿(おほいどの)」は基本的には養父、岳父を指すから、左大臣および其の家系という事に為る。ただ此処の様な御前という場面での〈大殿の頭中将〉という言い方には、帝の視線で妹君の子の頭君と其の従兄弟にあたる我が子の光君を対比するという、公の席にあつての帝の私的な気分を強調しているように感じる。そして其処に王朝らしい雰囲気が生々しく描写されていると思う。勿論、作者の意図として〈光る源氏〉は主人公だし、それに比肩する者として〈頭中将〉を登場させている事は自明だが、帝の眼から見ても他の皇子たちに抜きん出て優れていたのが〈光君〉であり、それに対抗しうるのは公式には臣下だが血筋では甥に当たる〈頭君〉だった、とあらためて主張している。位を極めた、其の上の存在である天皇にして、世の中は儘ならず、時代の焦点はド真中には無い、という世の有様まで言及しているようだ。いや是は、そういう実態が作者のリアルタイムでも在ったのだろう、という前提での推量だが。

入り方の日かげ(夕方の西日が)、さやかにさしたるに(照らし付ける舞姿に)、楽の声まさり(楽奏も高まり)、もののおもしろきほどに(宴も最盛となつて)、同じ(二度と是ほど雅な)舞の足踏み(舞の型も)、おももち(艶やかさも)、世に見えぬさまなり(無いと見える姿だった)。

詠(えい、舞手の詠唱)などしたまへるは(などを御二人が為されば)、「これや、仏の*御迦陵頻伽(おんかれうびんが)の声ならむ」と聞こゆ(とばかりに声が庭を通る)。*「迦陵頻伽」は、《想像上の鳥。雪山(せつせん)または極楽にいて、美しい声で鳴くという。上半身は美女、下半身は鳥の姿をしている。その美声を仏の声の形容とする。(大辞林)》、とある。

おもしろくあはれなるに(その歌があまりにも見事で趣き深いので)、帝、涙を拭ひ給ひ(のごひたまひ、拭いなさって)、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。詠はてて(歌が終わって)、袖うちなほしたまへるに(御二人が一礼なさるのを合図に)、待ちとりたる楽のにぎははしきに(再び奏でる笛太鼓の賑わいに)、顔の色あひまさりて(源氏の顔が良く映えて)、常よりも光ると見えたまふ(何時に増して光って見え為される)。

春宮の女御(とうぐうのによご、皇太子の母なる弘徽殿は)、かくめでたきにつけても(是ほどの目出度い出来栄えにつけても)、ただならず思して(敵側の手柄に感じて)、「神など、空にめでつべき容貌かな(神様が天に御招きになりそうなほどの美しさだこと)。うたてゆゆし(縁起でもない)」とのたまふを(と言いなさるのを)、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり(嫌な気分で聞いていた)。

藤壺は、「*おほけなき心のなからましかば(畏れ多い子の宿しさえなかったら)、ましてめでたく見えまし(どんなに晴れがましく見る事が出来たでしょう)」と思すに(と御思いに為ると)、夢の心地なむしたまひける(全てが夢で終わったような心地になっていらっしやいました)。 *「おほけなし」は<身の程をわきまえない畏れ多さ>と古語辞典にある。普通なら、「おほけなきころ」が「おはしからまし」のような敬語表現ではなく「なからまし」なのだから、藤壺自身の気持ちを言っ居そうなものだが、男女の仲の「ころ」は敬語表現に成らず共有性を含ませる事も在るので、この「ころ」が藤壺のものなのか源氏のものなのか共有なのかは、「注」にも判然としないのであるから、何とも判然としない。というわけで、此処の文は主語省略の曖昧さに重ねて、口を濁す曖昧表現を意図した曖昧文なので、文意其の物が断定しにくく、まして言い換えはほぼ不可能だが、かといって原文のままでは如何にも噛み砕けない。一先ず逐語で言い換えれば、「おほけなき心のなからましかば」は<分別があったなら>ではあるだろう。しかし之の時の藤壺は明らかに、源氏に比して圧倒的な重荷を抱えていた。懐妊である。そこで、移ろい易い「ころ」の成果でもあり、其れを一定の形に定めた<着床>を「ころ」に読み替えて、その明示を試みた。藤壺にとっての現実は身重の体であり、典雅に舞う目の前の源氏の姿は呑気な絵空事に見えた、に違い無い。その皮肉さが「まして」ということかも知れない。ただ「ましてめでたく見えまし」なのだから、藤壺は源氏の舞の典雅さ自体は「めでたく見え」ていた、ということではありそうだ。その<おほけなしさ>と<晴れがましさ>の絢交ぜが「夢の心地なむしたまひける」という複雑さで、作者は其を其の儘に書いて、藤壺の煩悶を伝えようとしているのだろうか。懐妊の身であれば、確かに漠然と<夢だったら>と呑気に思える状態ではなく、母の強さを備えつつ有る身としては、源氏との心の通いも情交も情人としての典雅さも、今となっては遠い<夢として=終わった出来事として>全てを受け入れる他無いのかもしれない、と解釈してみた。が、何せ曖昧だし、女心だし、別の意図も込めた文かもしれないし、単に思ったままの言葉に過ぎないのかも知れない。何れにせよ、原文も訳もどうにも言葉足らずに思えてならない。

宮は(その藤壺宮が)、やがて御宿直なりけり(この日の帝の夜伽をお勤めに為られたので御座います)。

「今日の試楽は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」と(と*夜御殿の寝所で帝が藤壺に)、聞こえたまへば(お尋ね為されると)、あいなう(不貞の子を身籠る罪深さに、その不貞の相手たる義理の子の源氏の舞がいくら素晴らしくても、心苦しく)、御いらへ聞こえにくくて(帝が我が子を愛でる親心が分かるだけに、其れに素直に同調して源氏を称えたいが、夫を裏切

っている後ろめたさから、藤壺には申し訳なさの余りに、答えに窮して)、 *「夜御殿(よるのおとど)」は「昼御座(ひのおまし)」の北続きの間。

「殊にはべりつ(格別で御座いました)」とばかり聞こえたまふ(とだけ申し上げる。源氏の見事な舞に上機嫌の親心で居る帝は藤壺のわだかまりを特に気に掛けることも無く、)。

「片手もけしうはあらずこそ見えつれ(片割れも悪くは無いとは見ていた)。舞のさま(舞姿や)、手づかひなむ(手の配りといったものが)、家(いへ、名門)の子は殊なる(やはり違う)。この世に名を得たる舞の男どもも(この世に男舞の名手は数々あって)、げにいとかしこけれど(確かに其々は上手だが)、ここしう(ここまで)なまめいたる筋を(見栄えのする遣り方を)、えなむ見せぬ(今だ嘗て見せた例がない)。

試みの日(演習で)、かく(此処まで見事に)尽くしつれば(遣り尽くしてしまつては)、紅葉の蔭や(朱雀院行幸当日の紅葉の下での舞が)さうごうしくと思へど(物足りなくなってしまうのではないかと思ひ遣られるが)、見せたてまつらむの心にて(其方に見せたい一心で)、用意せさせつる(執り行わさせた)」など聞こえたまふ(などと御話し為される)。

[第二段 試楽の翌日、源氏藤壺と和歌遠贈答]

つとめて(その翌朝)、中将君(ちゅうじゃうのきみ、源氏は藤壺に)、「いかに御覧じけむ(どのように御覧になられましたか)。世に知らぬ乱り心地ながらこそ(貴方の前では人知れず乱れた気持ちのままでしたが、)。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の、袖うち振りし心知りきや (和歌7-1)

なかなか会えないもんだから、つい手を振ってしまいました (意識7-1)

*是を理詰めで解釈しようとするれば、「我が子を宿した母君と其の秘密を知らない父上の前に顔を出せたものでは在りませんが、精一杯に歌舞の勤めを果たした誠意は汲んで頂きたい」となって、自分の貴女を慕う気持ちは抑えきれないが、父上には誠意を尽くして御仕えして行く所存ですので、貴方も平静を取り戻して御勤め下さい、という身勝手な繕いが見える。しかし、そんな小賢しい読み方は詰まらないので、「もの思ふに(何も他の人を思って)立ち舞ふべくも(踊っていたんじゃ)あらぬ身の(ないんだから)袖うち振りし(手を振って合図したのを)心知りきや(気付いてくれましたか)」、と軽く受け止めたい。だって、事態は言葉よりずっと重く推移しているわけで、言い繕って済む場合じゃない気がするし。済ませる気も無いだろうし。

あなかしこ(どうか分かって下さい)」 *「あなかしこ」は<あな(いや是は)><畏し(畏れ多いことです)>を原意とするようで、特に手紙の定型結句としては<謹言、謹んで申し上げます、失礼しました>という修辞になっている。此処でも手紙の結びなので、形式的な言い繕いとしては<恐縮です>という所だ。ただ源氏の気持ちに即して読めば、<あな(どうか)><賢く(分かって下さい)>という恋慕の訴えで、藤壺には其の意は伝わった筈だ。

と(と手紙を御出しになり)ある御返り(その御返事を藤壺宮としても)、目もあやなりし(目も眩まされた)御さま(演習の華やかさと)、容貌に(源氏の舞姿の素晴らしさに)、見たまひ(手紙を

見たまま)忍ばれずや(隠し置くには忍びなかったので)ありけむ(さすがに差し上げたもので御座いましょう)、

「唐人の袖振ることは遠けれど、立ち居につけてあはれとは見き (和歌7-2)

「遠くで手を振るお姿を、見逃す筈は在りません (意識7-2)

*是の理屈は「青海波」の原型が唐からもたされた事を受けて、「唐の人が青海波を舞ったのは昔の事でしょうが、振り付けの見事さに今でも感心します」と、どうでも良い様な社交辞令。あえて言えば、其の当たり障りの無さに妃としての卒の無さを見て取れる、という事はあるらしい。ただ源氏の贈歌に対する返しとしては、「青海波を舞う貴方の姿は遠かったけれど、しっかり見て感心して居ました」、くらいの即答だろう。

大方には(おほかたには、分かっています)」 *「大方には」は歌の表面に対応した意味としては、<雑感ですが>とか<素人見ですが>または<一観客として言えば>と言い換えられる。この下地としては、藤壺は<大方=世間一般>が如何思うかが気になってしょうがない、という深層心理が強く働いていたという描写ではあるのだろう。其れは帝に対して畏れ多いという事に他ならないが、このときの藤壺は母に成りつつあるがまだ成り切っては居ない中途半端な居心地の悪さと、この時でしか味わえない腹火照の高揚感および其の重さと軽さとがあって、其の多面性には留意すべきかとも思う。それに「大方には」の原義は<細かな点は左で置き全体では>ということだが、歌表に対して<だいたいの所は>とか<まあまあでした>と否したとは考えられない。ところが歌意に対してはこの原義がそのまま当てはまるという妙意。詰まり<経緯は如何で在れ貴方の気持ちは、分かっています>という返事。

とあるを(この藤壺の返歌を)、限りなうめづらしう(源氏は心底喜んで)、「かやうの方さへ(こうした舞の由来まで)、たどたどしからず(御存知で)、余所の朝廷(ひとのみかど、唐土の宮廷)まで思ほしやれる(にまで気遣い為される)御后言葉の(おんきさきことばの、妃として詠まれた歌の)、*かねても(立場を兼ねた見事さ)」と、ほほ笑まれて、*持経(ぢきやう、護身經典=御守り)のやうに(を読誦するように)引き広げて(ひきひろげて、何度も暗誦して)見みたまへり(見て居らっしゃいました)。 *「兼ねても」は此処の文の急所で、藤壺が唐楽に託けた社交辞令に紛らわせて、源氏の思いを汲んでくれた事に、源氏が「限りなうめづらしう」思ったことを示している。つまりは歌の真意が其処に在ることを語り手が明示している珍しい事例と成っている。 *「持経」を持ち出してきた。こういう仏教がらみの気の利いた言い回しは、気の利いた所まで含めると、先ず言い換えは不可能となる。尤も、この描写で源氏の姿は想像しやすい。「持経を引き広げ」たい源氏の気持ちも分かる気もする。しかし絶対禁忌を犯した秘密の重さは、歌を声に出して詠む事を許さないし、手紙自体も多分小さく、何より隠すべき物だった筈だ。だから気持ちの上では「持経を引き広げ」ていても、実際は自室に籠もって大事そうに見入っていたのだろう。其れを承知で源氏の気持ちを前面に押し出した語り口調は、そのまま言い換えると紛らわしいが、言い換えなくて済むほど平易でもない。

[第三段 十月十余日、朱雀院へ行幸]

行幸(ぎやうがう)には、親王(みこ)たちなど、世に残る人なく(主だった人は残らず)仕うまつりたまへり(お供なさいました)。春宮もおはします(皇太子もお出掛けなさいます)。例の(朱雀院の庭では宴には決まって)、楽の舟ども漕ぎめぐりて(池に楽奏の船が漕ぎ回って)、*唐土(もろこし)、高麗(こま)と、尽くしたる舞ども(見事に演じきる舞の数々は)、種(くさ、演目が)多かり(沢山在った)。楽の声、鼓(つづみ)の音、世を響かす。 *「唐土」「高麗」は其々<唐楽(とうがく)>

高麗楽(こまがく)の事とされる。一般に<唐楽>は<管絃>で、<高麗楽>は<笛太鼓>の編成という。此处では何れも<舞楽>という舞いの為の演奏のようで、演目ごとに踊り手が相当数居て、大変な賑わいだったのだろう。

一日(ひとひ、先日)の源氏の御夕影(おんゆうかげ、夕映えのお姿が余りにも幽玄の美しさだったので)、ゆゆしう思されて(帝は天に召されやせぬかと御心配なされて)、御誦経(みじゅきやう、魔除けの読経)など所々に(などを幾つかの寺に)せさせたまふを(上げさせ為されるのを)、聞く人もことわりと(それと聞いた人は尤もな事と)あはれがり聞こゆるに(感じ入り申し上げるが)、*春宮の女御は(東宮の母御は)、あながちなりと(大袈裟な事と)、憎みきこえたまふ(非難為される)。*「春宮の女御」は弘徽殿女御だが、試楽の際には源氏の優れた容姿を「うたてゆゆし」と縁起でもない言い方で妬んでいた人こそが、この人だった。

*垣代(かいしろ)など、*殿上人(てんじゃうびと)、地下(ぢげ)も、心殊なりと(特に心得があると)世人に思はれたる(評判の高い)有職(いうそく、名手)の限り(ばかりを)ととのへさせたまへり(揃えさせ為されました)。*「垣代」は庭先の舞台を垣根代わりに取り囲む楽人、との事。*「殿上人」と「地下」は、清涼殿の「殿上の間(てんじゃうのま)」に入ることを許された者と許されない者との違い。「殿上間」自体は清涼殿の南庇にある殿上人の詰め所だが、帝の昼御座手前の控えの間で、つまりは帝に会えるかどうかの身分差である。一般に五位以上が殿上で六位以下が地下らしいが、蔵人などは六位でも殿上が許されたという。

宰相二人(参議の二人の)、*左衛門督(さゑもんのかみ)、右衛門督(うゑもんのかみ)、左右(ひだりみぎ)の楽のここと行ふ(の楽隊の指揮を執る)。*「左右衛門督」は「左右衛門府」の「督=長官」という。「衛門府」は<<律令制の官司の一。宮城諸門の警備、部署の巡検、行幸の先駆けなどにあたった。大同3年(808)左右衛士府(えじふ)に併合、弘仁2年(811)左右衛門府となった。職員は、多く検非違使(けびいし)を兼任した。鞆負司(ゆげいのつかさ)。(Yahoo 辞書)>>とあって、大内裏全体の警察というところか。左右二府は陰陽思想というよりは、交代で絶えず警備する実務からだろう。武力制圧権を持つ「衛府」は他に、庁内の人事や事情に精通して貴人への配慮を旨とする内裏内警備の「兵衛府」と自身が貴人たる帝近侍の「近衛府」があるが、部隊を編成して指揮を執るという組織管理においては「衛門府」が実質を担っていたようだ。

舞の師どもなど(舞人たちは振りを覚える為に)、世になべてならぬを取りつつ(世に名高い師を招いて)、おのおの籠りゐてなむ習ひける(各自家に籠もって練習を重ねてきた)。

木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代(よそびとのかいしろ)、言ひ知らず(言葉の出ないほど素晴らしい)吹き立てたる物の音どもに(吹き立てた笛の音に)あひたる松風(響き合う松風)、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の葉のなかより、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ(まるで此の世の物とも思えぬ艶やかさで、恐いくらいの陶醉感が漂っていた)。

かざしの(源氏が髪挿しにした)紅葉いたう散り過ぎて(紅葉が舞で散り過ぎてしまって)、顔のにはひけに(顔の輝きに比べて)おされたる心地すれば(寂しく感じられたので)、御前なる菊を折りて(直ぐ手前の菊を手折って)、*左大将(さだいしやう、左近衛長官)さし替へたまふ(が差し替えなさる)。*「大将」は近衛府の最高位武官だが、近衛府の職掌は治安ではなく帝および要人の身体警護であり、その長ということは実質で帝の最高位の近侍に他ならない。政治向きの地位は大臣に及ばないとしても、権威は帝

の其れを実体化しているので、図抜けた高官である。舞台袖に大将が控えているということの源氏の尊さを示す書き方、ということなのだろう。

日暮れかかるほどに、けしきばかり(形ばかりに)うちしぐれて(少し時雨れて)、空のけしきさへ(空模様さえ)見知り顔なるに(感涙を流すほどの)、さるいみじき姿に(その見事な舞姿に)、菊の色々移ろひ(菊が涙雨に濡れて色を変え)、えならぬを(風情が増した物を)かざして(冠に挿して)、今日はまたなき手を尽くしたる(今日は試楽に比しても又格別の出来栄えであった。)

入綾のほど、そぞろ寒く(総引けのような冷気を誘い)、この世のことともおぼえず。もの見知るまじき(風雅を嗜まぬ)下人(しもびと)などの、木のもと(幹の根元や)、岩隠れ(岩陰や)、山の(築山の)木の葉に埋もれたるさへ(吹き溜まりにいる者でさえ)、すこしものの心知るは(少しでも物心ある者なら)涙落としけり(感涙を落とした)。「入綾(いりあや)」は《舞楽で、退場するとき、舞いながら舞台を降りる演出。また、その舞。入舞(いりまい)。(Yahoo 辞書)》とある。

*承香殿(じょうきやうでん)の御腹の四の御子(しのみこ、帝の四番目の子が)、まだ童(わらは、童姿)にて(にて可愛らしく)、*秋風楽(しゅうふうらく)舞ひたまへるなむ(を舞なされたのが)、さしつぎの(其れに次ぐ)見物(みもの)なりける(であった)。*「承香殿(じょうきやうでん、しょうこうでん)」は《平安京内裏十七殿の一。内裏中央、仁寿殿(じじゅうでん)の北にあり、内宴・御遊などが行われた。(Yahoo 辞書)》とあるが、この説明では後宮らしからぬ印象で、此処は其処に住まう女御を指している筈だから物足りない。そこで Wikipedia を当たると《清涼殿の北東。中央を馬道が通り、身舎(寝殿でいう母屋)を東西に二分していた。》とあり《平安御所の後宮の七殿五舎のうちの一つ。七殿の中では、弘徽殿について格式の高い殿舎とされ、女御などが居住し、またここで古今集が編纂された。》とあった。どうやら馬道で東西に二分されたどちらかの母屋に住んでいた女御らしい。*「秋風楽」は《雅楽。唐楽。盤渉(ばんしき)調の中曲。舞は四人舞。現在は曲・舞ともに廃絶。(Yahoo 辞書)》とあり、他を少し Web 検索しても仔細不明。

これらに(この二つに)おもしろさの尽きにければ、他事に目も移らず、かへりては(反って)ことざましにやありけむ(興醒めでさえあったかも知れない)。

その夜、源氏中将、正三位(じょうざんみ)したまふ(に成られる)。頭中将、正下(じょうげ、正四位下)の加階したまふ(に昇進なさる)。上達部(かんだちめ、上層部)は、皆さるべき限り(皆それなりに)よろこびしたまふも(昇進できたのも)、この君にひかれたまへるなれば(源氏の君の功績の賜物なれば)、人の目をもおどろかし(見事な舞で人の目を驚かせ)、心をもよろこばせたまふ(有難い徳で実利まで恵む)、昔の世ゆかしげなり(源氏の前世の善行が偲ばれます)。

[第四段 葵の上、源氏の態度を不快に思う]

宮は(藤壺宮は)、そのころ(行幸の時には)まかだたまひぬれば(実家の三条宮邸に御下がりになり成っていて)、例の(源氏はまた)、隙もやと(会える機会が無いものかと隙を見て)うかがひありきたまふを(宮邸を伺いお出掛けなさるのが)ことにて(多くて)、大殿には(左大臣家の正妻にあっては)騒がれたまふ(心穏やかならざる所で御座いました)。

いとど(まして)、かの若草たづね取りたまひてしを(源氏が若草であった紫のゆかりなる姫君をお引取りなされたのを)、「二条院には人迎へたまふなり(源氏が二条の院に妻を御迎えに成られた)」と人の聞こえければ(と人が噂するのを耳にして)、いと心づきなしと思いたり(正妻の姫君はひどく不愉快に思っていました)。

(その正妻の様子に源氏は)「*うちうちのありさまは知りたまはず(幼子を育てているという事情を知らないから)、さも思さむはことわりなれど(そう思うのも無理は無いが)、心うつくしく(素直になって)、例の人のやうに(普通の人と同じように)怨みのたまはば(不平を仰れば)、我もうらなくうち語りて(私も正直に御説明して)、慰めきこえてむものを(お分かり頂けるものを)、思はずにのみ(気に入らないだけで)とりないたまふ(取り合わず口も御利きにならない)心づきなさに(頑なさに)、さもあるまじき(しなくても良い)すさびごとも(浮気遊びも)出で来るぞかし(出て来てしまうものだ)。 *<内情を知らない>とは言っても元々が色目当てには違いないので、「裏無く打ち語りて」も、とても正妻が「慰め聞こえてむもの」、とは思えないが。

人の御ありさまの(正妻を見ていると)、かたほに(少しも)、そのことの飽かぬとおぼゆる(其処が悪いと思える)疵もなし(欠点もない)。人よりさきに見たてまつりそめてしかば(一番先に娶った人なのだから)、あはれにやむごとなく(愛しく大切に)思ひきこゆる心をも(思い申している気持ちまでは)、知りたまはぬほどこそあらめ(お分かり頂けない様だが)、つひには(いつかは)思し直されなむ(思い直されるだろう)」と(と御思いになり、また)、「おだしく(落ち着いて)軽々しからぬ(軽々しく事を荒立てる事など為さらない)御心のほども(御性格なのだから)、おのづから(その内きつと、分かって下さる)」と、頼まるる方は(と期待なさる向きは)ことなりけり(とても強く御在りでした)。